

ID No.	356
研究課題名	新規 B 細胞性リンパ腫制御機構の解明
研究代表者	高村 祥子 (愛知医科大学・教授)
研究組織	
受入教員	三宅 健介 (東京大学医科学研究所・教授)
研究分担者	Erdenezaya Odkhuu (愛知医科大学・助教) 一文字 功 (愛知医科大学・助教) 森田 奈央子 (愛知医科大学・大学院生)
研究報告書	<p>TLR(Toll-like receptor)4類似分子であるRP105は分泌タンパクMD-1と会合して初めてB細胞表面に発現し、抗RP105抗体刺激により強力なB細胞活性化を誘導することができる。</p> <p>RP105やMD-1に関しては肥満や自己免疫疾患との関連が示唆されており、自己免疫疾患では病勢を反映するマーカーや自己抗体産生のターゲットになりうる可能性が示唆されている。このためRP105やMD-1の機能解析やその意義を明らかにすることは重要であると思われるが、まだ不明な点も多い。われわれはMD-1がリン脂質・リゾリン脂質と結合する構造であることからMD-1結合脂質のひとつであるSphingosine 1-Phosphate (S1P)に着目して解析を行い、S1P受容体がB細胞機能に重要であることや、MD-1とB細胞性リンパ腫発症との関連を見出した。</p> <p>また MD-1 に対するモノクローナル抗体を用いて ELISA システムを確立し、血清中 MD-1 濃度を同定した。さらに MD-1 は感染、高栄養食、虚血再灌流障害などの際に血清中に高濃度発現してくることも見出し、その産生候補のひとつがマクロファージである可能性も見出した(キーストーンミーティングにて報告、論文投稿中)。今後 MD-1 がリンパ腫制御にどう関与しているのかについて明らかにしていく。</p>